いわゆる「元型夢」と関連する心的機能について

——Archetypal Dream Scale による検討——

関根　剛*・小川　捷之**

A Study of the Psychological Functions Related "Archetypal Dreams" Using Archetypal Dream Scale

Tsuyoshi SEKINE and Katsuyuki OGAWA

SUMMARY

The purpose of this study is to discuss archetypal dreams and their relations to the dreamers personalities.

A questionaire consisting of questions related to the frequency of dream recall and one's interest in dreams and a section for describing freely one's vividest dreams was given to 156 female university students. At the same time MBTI (Myers-Briggs Type Indicator) for Jung's typology was also given to them.

To determine whether or not it was archetypal, each dream was rated on the basis of the four criteria of the Archetypal Dream Scale composed by Kluger (1975).

The following 4 points were discussed:

(1) The frequency of occurence of control dreams and vivid dreams; Kluger's study was followed in part.

(2) The relation between collected archetypal dreams and the functions of personalities in Jung's theory.

(3) The relation between the frequency of dream recall and functions of personalities or occurence of archetypal dreams.

(4) The relation between the subjects' interest in dreams and functions of personalities or occurence of archetypal dreams.

The results were as follows:

(1) Vivid dreams were significantly ($p<.001$) more archetypal than control dreams.

(2) The occurence of archetypal dreams had a close relation to Perceiving (Irrational function), especially Intuition in it. Those who had archetypal dreams were superior in their Perceiving and Intuition to those who did not have any archetypal dreams.

(3) The frequency of dream recall had a certain relation to Judging (Rational function) and no relations to the occurence of archetypal dreams.

Those who had a high frequency of dream recall were superior in Thinking to those who had a low frequency.

(4) There were no relations between the degree of the interest in dreams and the function of personalities or the occurence of archetypal dreams.

* 本学大学院教育学研究科 (Dept. of Psychology)
** 心理学教室 (Dept. of Psychology)

問　　題

S. Freud (1900) 以降，現在に致るまでの夢 (dream) に関する研究の動向は，以下の1つの系譜があると考えられる。1・REM (Rapid Eye Movement) を中心とした脳生理学的研究 (Aserinsky & Kleitman, 1953; Dement & Kleitman, 1957; Goodenough, 1965; 大熊, 1971 等)，2・夢見頻度 (Frequency of Dream Recall) に関する研究 (Goodenough, 1959; Schonbar, 1965; Orlinsky, 1966; Witkin, 1970 等)，3・夢内容 (Dream Content) に関する研究 (Van de Castle, 1956; 北見, 1957, 1958, 1959, 1969, Hall, C. S. & Van de Castle, 1966; 大熊, 1972 等)。上記の諸研究はいずれも，夢を様々な側面から客観的にとらえ，検討し，研究を遂行してきている。

一方，心理療法 (Psychotherapy) 等の心理臨床の場に於て，クライエントが夢を通じて何か深く大きな体験をしたり，夢が宗教的回心のような人格変容の大きなきっかけとなることがある。そして，そのような事は決して悌なことではない。ところが，こうした事実がよく認められるにもかかわらず，現在までの夢研究に於ては量的・形態的・客観的側面の検討がほとんどを占め，夢の「深さ」・「大きさ」等の主観的な側面については，事例研究等を除けばほとんどなされていないのが現状である。

そこで，本論では主観的な体験でもある「夢の深さ (Depth of Dreaming)」というものを，Jung. C. G. の言うところの元型 (Archetype) との関連でとらえ，元型的な夢 (Archetypal Dream) がどのような性格特性の持主によって見られるのかを明らかにしようとした。つまり，元型夢といわれるものの出現をその夢主（夢を見た人，Dreamer を以下夢主と述べる）の Personality の側面からの検討を加えてみることを目的とした。

本研究は，以下の手順で検討を進めた。

1. H.Y. Kluger (1975) によって作成された元型夢を判別するための Scale の検討。つまり，Kluger による研究の一部を追試し，いわゆる統制夢と印象夢には元型夢の出現率に差があるかを明確にする。
2. 元型夢の報告と Jung. C. G. による Personality の機能との間に関連があるか否かを検討する。
3. 夢見頻度 (Frequency of Dream Recall) は Personality 機能及び元型夢出現率と関連があるかを検討する。
4. 夢についての興味は Personality 機能及び元型夢出現率と関連があるかを検討する。

Archetypal Dream Scale について

元型的なモチーフやシンボルに関する検討は，精神分析学派，特に Jung 派の研究者を中心として数多く行なわれてきた。そして，そこで明らかにされたモチーフやシンボルが，実際，夢分析 (dream analysis) などの臨床の場で用いられ，かつ臨床的に検討されてきた。しかし，何をもって「元型夢」と考えるかということになると，明確な定義は存在し

ないと言っても過言ではない。それ故に，元型夢に関する実証的研究は非常に困難であった。

Kluger (1975) は，Jung. C. G. のいう「元型」や「集合的無意識 (collective unconciousness)」なる概念のもつ諸特性を吟味・検討し，元型夢か否かを判別する為に4カテゴリーからなる尺度，Archetypal Dream Scale を作成した。この尺度を紹介すると以下の通りである。Ⅰ～Ⅳはカテゴリーを示し，以下の基準により各カテゴリーごとの得点化を行なう。

Ⅰ：神話的テーマの類似性 (Mythic Parallel)

3 点・密接な類似性 (a close parallel)；(例) 東洋の寺院で巨大な像が蘇える。「ずっと待ち続けていた善と悪との戦いの時が来た。」と何者かが言う。と，続いてすさまじい戦いがおこる。〈類似〉ゾロアスター教，黙示録

2 点・おだやかな類似性 (a moderate parallel)；(例) 彼女（夢主）は夫のポケットにラップで包んだペニスをそっとすべりこませる。彼女は，自分の義務感は果したもののいったいどうすればそれがもと通りに再生できるのか，と複雑な気持を抱いている。〈類似〉イシスとオシリスの神話，切断されたファルス（ペニス）の再生

1 点・かすかな類似性 (a distant parallel)；(例) 好きな所を意のままに飛びまわる。〈類似〉イカルスの神話

Ⅱ：情動性 (Affect)；その夢を見た夢主自身の情動

4 点・非常に強い (very strong)；(例) 畏怖，パニック，戦慄，エクスタシー

3 点・強い，緊迫 (strong or stressed)；(例) 恐怖，肝をつぶす，倖福，大喜び

2 点・緩い，おだやか (mild or moderate)；(例) 快，不快，満足，悩まされる

1 点・わずか，ない (slight or absent)

Ⅲ：合理性 (Rationality)；夢がその夢主の周囲で実際におこりうる度合と，実際の自然法則に従がう度合

4 点・合理的でおこりうること (rational, and not unlikely)；(例) オートバイに乗っていて，石にぶつかって転んだ。

3 点・合理的だが，異常なことで望ましくない (rational-possible)；(例) サンフランシスコがソビエト軍に爆撃される。

2 点・合理的で自然の法則に従ってはいるが，まずありえない (rational-unlikely)；(例) 白熊に林の中を追われる。

1χ・自然の法則に従っているかどうかは不明確 (border line)；(例) 貨車がひかれていく。エンジンはついていない。

1 点・合理的ではないが，理解はできる (non-rational but comprehensible)；(例) 納屋の周囲で遊んでいると，突然，緑色の蛇があらわれあたりをうずめる。

0 点・非合理的で，現実にはおこりえない (irrational)；(例) ライオンの頭をもつ人間がいる。

B・異様な (bizarre)；(例) 胸に動脈がうきあがり，人造ダイヤやスパンコールが散りばめられている。

Ⅳ：日常性 (Everydayness)

4 点・ごく日常的 (for dreams just like everyday life)；(例) 友達と近郊へのドライブの計画をたてている。

3 点・日常生活からわずかなズレがある (slight variation from everyday life)；(例) 既に卒業しており，その分野では相当の地位についている (学生の夢)。

2 点・日常生活からありえそうもないズレがある (unlikely variations from everyday life)；(例) 寮の女性の全てが休暇前に集まり，皆が長い別れを悲しみ泣いている。

1χ・日常現活ではありえない歪みがある (with an impossible twist to everyday life)；(例) 芸をしていた馬が突然，象に変身した。

1 点・日常では全くありえない (very unlikely in everyday life)；(例) 泥道を歩いていると，飛行機が人々の頭上すれすれを飛びすぎていき，再び人々をわざとのようになぎ倒して着陸する。

0 点・日常生活から離れ，一種奇妙な感情をおびる (very remote from everyday life, or with the feeling tone of the strange and unfamiliar)；(例) 高い生垣の迷路を歩く。私は中央 (center) へたどりつこうとしている。あたりには，もやがただよい，芝が足もとに広がっている。河か堀が近いように感じる。私は長髪であり，前世紀的な服装をしている。私は古い民謡 ～Where I come from nobody knows～ を歌っている。私は迷路からぬけ出すか，中央まで行かねばならないということがわかっている。

B・異様な (bizarre)；(例) 胸に動脈がうきあがり，人造ダイヤやスパンコールが散りばめられている。

元型得点 (The archetypality score) は，前述した各カテゴリーが一定の値以上を満たしているか否かによって0点又は1点と評点され，4カテゴリーを合計することで元型得点は0～4点と評点される。その各カテゴリーごとの一定の値は以下に示す通りである。

Ⅰ・神話的テーマの類似性：1～3点
Ⅱ・情動性　　：3～4点
Ⅲ・合理性　　：B～1点
Ⅳ・日常性　　：B～1点

この元型得点が3～4点を示す夢を「元型夢」と考えるものとする。

この Archetypal Dream Scale を用いた研究として以下のものがあり，簡単な紹介をする。

H.Y. Kluger (1975) の研究

上記の scale の有効性を検討するための調査を行なっている。218名（男子103名，女子115名）の被験者に，①最も幼い頃の夢（幼児夢），②最も印象的な夢（印象夢），③最近に見た夢（統制夢）を記述させ，この scale を用いて評定した。又，面接治療中の患者の夢の評定も行なっている。

仮説として考えられたことは，①元型夢はその強烈さ故に印象夢となるであろう，②幼

児夢はその未分化さ故に元型夢としてあらわれやすい，③面接治療中の患者の夢は無意識が活性化されている故に，一般大学生のそれと比較して元型的な夢が多い。

調査の結果，幼児夢の56%，印象夢の65%のものが元型夢と評定された。どちらも統制夢（20%）に比較して有意に高い元型夢の出現率を示した（P<.001)。又，治療中の患者の夢も一般大学生に比して高い数値を示した。

P. A. Faber 他 (1978) の研究

5年間以上（5.5年～30年：平均12.1年），ヨガ等のメディテーションをしている群（男子4名，女子3名：21～67才：平均41.3才）を実験群とし，一方，ヨガ等の経験の全くない，性，教育程度，社会階層など実験群と対応した統制群（23～62才：平均39.3才）を設定した。(両群ともに夢や Jung 心理学等に特別な関心は有していない。)

夢は REM 期覚醒法（REM 夢）及び自宅で想起する方法（自宅夢）により収集した。その結果，実験群で158個（REM 夢45個，自宅夢113個)，統制群で121個（REM 夢42個，自宅夢79個）が報告された。

夢見頻度について言えば，REM 夢では実験群に有意に高く（P<.025)，自宅夢では有意差は認められなかった（P<.10)。又，報告された夢を Archetypal Dream Scale を用いて評定，比較したところ，元型夢の出現は実験群において REM 夢（P<.05)，自宅夢（P<.01)，合計（P<.005）ともに著しく高かった。

P. A. Faber, G. S. Saayman 他 (1983) の研究

18～26才までの被験者26名（男子6名，女子20名）を2群にわけ，一方を統制群，一方をメディテーションを行なう実験群として，メディテーションが夢にいかなる影響を及ぼすかを検討した。

実験は，①メディテーションを行なわない期間，②メディテーションを行なっている期間，③メディテーションを終了してからの期間の3期，各21日間ずつ行なわれ，被験者は毎朝その夜の夢を報告する形式をとった。

その結果，63日間で実験群で572個，統制群で455個の夢が報告された（夢見頻度に関しては統計的に有意差は見出されなかった)。又，元型夢の出現頻度に関しては，ともに実験群が有意に高い出現率と得点を示した。

目　的・方　法

目的： 元型夢の報告と Jung. C. G. による Personality 機能及び夢見頻度，夢についての興味との関連を検討する。

被験者： 心理学を受講中の一般大学生239名（男子59名，女子180名）に「夢に関するアンケート」及び MBTI 性格検査 (Meyers-Briggs Type Indicater) を施行した。分析にあたっては，被験者数に偏りがあるため女子のみを分析対象とし，記入もれや評定不能なデータを除外した156名についてのみ分析を行なった。

夢に関するアンケート： 各被験者に以下の項目について自由記述ないし選択させた。

① 最近見た夢についてなるべく詳しく書いて下さい。(以下統制夢)

② 今まで見た夢の中で最も印象的な夢についてなるべく詳しく書いて下さい。(以下印象夢)

③ 夢はどれ位見ますか。(以下夢見頻度)；A・ほとんど毎日，B・週に3～4回，C・月に3～4回，D・年に数回，E・ほとんど無い

④ 夢に興味はありますか。(以下夢興味)；A・非常にある，B・ある，C・まあある，D・あまりない，E・ない

MBTI 性格検査*： Jung, C. G. の Personality ・タイプ論に基づいて Myer (1962) が作成したテストである。95項目の強制選択法によって，内向 (Introversion, 以下 I)，外向 (Extraversion, 以下 E)，感情 (Feeling, 以下 F)，思考 (Thinking, 以下 T)，直観 (Intuition, 以下 N)，感覚 (Sensation, 以下 S)，知覚 (Jung. C. G. の言う非合理機能，Perceiving, 以下 P)，判断 (Jung. C. G. の言う合理機能，Judging, 以下 J) の8特性を得点化し (粗点)，対立する特性の組合せによって4つの尺度得点 (IE〈内向—外向〉，NS〈直観—感覚〉，FT〈感情—思考〉，PJ〈知覚—判断〉，得点が高い程各々 I, N, F, P 傾向が強くなる) を算出して，被験者のタイプを決定する。

本研究の被験者の尺度得点の平均と標準偏差値を早大版 MBTI 作成時の資料と比較して Table 1 に示す。尚，本研究では被験者は全て女子であるため，比較のために紹介した早大版 MBTI の資料も女子のみのデータ (N＝76) を用いている。

Table 1. MBTI の4尺度得点と標準偏差値の早大版との比較

	本調査	早大版
IE (内向—外向)	113.0 (15.9)	105.5 (24.1)
NS (直観—感覚)	99.2 (17.2)	101.1 (18.8)
FT (感情—思考)	105.5 (19.1)	108.0 (18.8)
PJ (知覚—判断)	94.4 (21.6)	96.6 (23.1)

Table 1 に示されたように，本研究に於ては IE 尺度で内向に片寄っている ($P<.05$) 以外は，早大版 MBTI とほぼ同様の平均と標準偏差値を示している。

被験者のグルーピング： 被験者は研究計画に従って，以下のようなグルーピングがなされた。

1. 報告された統制夢と印象夢を Archetypal Dream Scale に従って評定し**，元型夢と評定された夢の数を Table 2 に示す。以下，本研究では，統制夢における元型夢群を Control-Archetypal 群 (以下 C-A 群，N＝22)，統制夢における非元型夢群を Control-

* 本研究では標準化された日本語版 MBTI は入手できなかったため，横地 (1981) によって独自に翻訳，標準化の試みがなされた早大版 MBTI を用いた。

** 本調査においては，各カテゴリーで一定の値を満たしているか，否かを評定した。と言うのは，それ以上細く評定することは本研究ではそれ程重要ではないと考えられるからである。

Table 2.　統制夢及び印象夢におけるA群とNA群の出現頻度

	非元型夢(NA群)	元型夢群(A群)
統制夢	134	22
印象夢	64	92

Non Archetypal 群（以下 C-NA 群，N=134）とする。又，印象夢における元型夢群を Vivid-Archetypal 群（以下 V-A 群，N=92），印象夢における非元型夢群を Vivid-Non Archetypal 群（以下 V-NA 群，N=64）とする。

2.　アンケート③でたずねた項目に従って夢見頻度の多い群を Frequency-High 群（以下 FH 群），少ない群を Frequency-Low 群（以下 FL 群）とした。本調査では「B・週に3～4回」と回答した者が77名と全体の半数以上を占めたために，単純に二分することには無理があったので，B回答者を削除して，A回答者を FH 群（N=33），C・D・E回答者を FL 群（N=41）としてグルーピングした。

3.　アンケート④でたずねた項目に従って夢興味の高い群を Interest-High 群（以下 IH 群，N=86），低い群を Interest-Low 群（以下 IL 群，N=62）としてグルーピングした。

結　　果

Archetypal Dream Scale による元型夢の出現率及び同 Scale の下位カテゴリーで，一定の値（Ⅰ・神話的テーマの類似性；1～3点，Ⅱ・情動性；3～4点，Ⅲ・合理性；B～1点，Ⅳ・日常性；B～1点）をとった夢の比率を統制夢と印象夢と比較して Table 3 に示す。

Table 3.　統制夢及び印象夢における元型夢の出現頻度ならびに Archetypal Dream Scale の各下位カテゴリーでの比較

	統制夢	印象夢	χ^2 検定
元型夢	14.1%	59.0%	***
下位カテゴリー			
神話的テーマ	16.0%	63.3%	***
情動性	27.6%	64.1%	***
合理性	12.3%	52.6%	***
日常性	20.5%	55.8%	***

注　*** P<.001

Table 3 から，印象的な夢として報告されたものは元型夢と評定されたものが多く（P<.001），Archetypal Dream Scale の全ての下立カテゴリーにおいても有意に高い出現率を示した（P<.001）。このことから，印象夢は統制夢に比べてより元型的な夢であると考

えることができる。又，この結果は Kluger (1975) の研究結果と同様であり，Kluger の仮説（「元型夢はその強烈さ故に印象的な夢となるだろう」）が確認されたと言える。

次に，統制夢における元型夢群（C-A 群）と非元型夢群（C-NA 群）に施行した MBTI の結果を Table 4, Table 5 に示す。

Table 4.　統制夢におけるＮＡ群とＡ群の MBTI の粗点の比較

（　）内 SD

	非元型夢群（ＮＡ群）	元型夢群（Ａ群）	t 検定
I（内向）	12.4 (5.5)	13.4 (6.8)	
E（外向）	5.9 (2.0)	6.1 (2.0)	
N（直観）	12.1 (3.7)	13.6 (3.6)	
S（感覚）	12.4 (4.8)	9.0 (3.8)	*
F（感情）	12.6 (4.1)	12.0 (3.4)	
T（思考）	9.3 (5.2)	10.1 (5.1)	
P（知覚）	11.3 (5.4)	14.3 (3.4)	†
J（判断）	14.1 (5.3)	11.1 (5.1)	†

注　* P<.05　† P<.10

Table 5.　統制夢におけるＮＡ群とＡ群の MBTI の尺度得点の比較

（　）内 SD

	非元型夢群（ＮＡ・）	元型夢群（Ａ群）
ＩＥ（内向―外向）	114 (13)	118 (15)
ＮＳ（直観―感覚）	100 (16)	106 (15)
ＦＴ（感情―思考）	108 (18)	107 (14)
ＰＪ（知覚―判断）	100 (21)	104 (19)

Table 4 に見られるように C-NA 群は S（感覚；P<.05），J（判断；P<.10）が，一方，C-A 群は P（知覚；P<.10）が有意に高い得点を示した。この事がら，統制夢に於て元型的な夢を見る者はやや知覚タイプであり，感覚タイプではないと言える。しかし，尺度得点により両群間を比較すると，Table 5 に示されるように心的態度（IE）や心的機能（NS, FT, PJ）に於ては有意な結果は認められなかった。

次に印象夢に於る元型夢群（V-A 群）と非元型夢群（V-NA 群）に施行した MBTI の結果を Table 6, Table 7 に示す。

Table 6, Table 7 に見られるように，V-NA 群は S（感覚；P<.001），J（判断；P<.01）が，一方，V-A 群は NS（直観―感覚；P<.05），N（直観；P<.01），P（知覚；P<.05）が有意に高い得点を示した。この事から，印象夢に於て元型的な夢を見る者は知覚タイプであり，直観タイプであると言える。この結果は，統制夢に於る特徴がより顕著に表われているとも言える。

以上をまとめると，元型夢の報告は判断機能（合理機能）よりも知覚機能（非合理機能）

Table 6.　印象夢におけるＮＡ群とＡ群のMBTIの粗点の比較

（　）内 SD

	非元型夢群（ＮＡ群）	元型夢群（Ａ群）	t 検定
Ｉ（内向）	12.3 (4.8)	12.1 (6.1)	
Ｅ（外向）	6.1 (2.0)	5.6 (2.1)	
Ｎ（直観）	11.1 (4.1)	13.4 (3.3)	*
Ｓ（感覚）	14.6 (5.4)	10.4 (3.6)	***
Ｆ（感情）	12.0 (3.9)	12.7 (4.0)	
Ｔ（思考）	10.3 (5.1)	9.6 (4.4)	
Ｐ（知覚）	10.5 (5.6)	13.5 (5.8)	*
Ｊ（判断）	15.0 (5.6)	11.9 (4.6)	**

注　*** Ｐ<.001　** Ｐ<.01　* Ｐ<.05

Table 7.　印象夢におけるＮＡ群とＡ群のMBTIの尺度得点の比較

（　）内 SD

	非元型夢群（ＮＡ群）	元型夢群（Ａ群）	t 検定
ＩＥ（内向―外向）	113 (11)	116 (15)	
ＮＳ（直観―感覚）	97 (17)	104 (14)	**
ＦＴ（感情―思考）	106 (19)	109 (16)	
ＰＪ（知覚―判断）	103 (21)	98 (20)	

注　** Ｐ<.01

が，感覚機能よりも直観機能の発達している者に多いことが認められた。つまり，元型夢の報告は知覚機能（特に直観機能）に大きく依存していると考えられる。

Jung. C. G. は直観機能を「無意識的な道を通って知覚」する機能であり，「そこに内包される意味」を知る，と定義づけ，一方，感覚機能を「ある生理刺激を知覚に仲介する機能」であり，「そこに何があるか」を知る，と定義づけた。

本研究で検討している元型夢とは，非日常的で不合理な夢である。と言うことは，夢の状況や展開は親和性の低い，わけのわからないものとして体験されやすい，と考えられる。とするならば，感覚タイプの者は元型夢を「すごいけれど，わけのわからない夢」として処理し，忘却してしまうということは十分に考えられるであろう。それに対して，直観タイプの者は元型夢のもつ意味をかぎわけ，「わけがわからないが，何かひっかかる夢」として記憶し，ある時は印象深い夢として覚えている。ということが考えられる。

又，元型夢の報告と判断機能（合理機能）はほとんど関係が無いことから，見た夢を論理や感情で価値づけ，方向づけることは問題ではなく，夢をどう把握するかこそが元型夢報告にとっては問題なのである。

次に，夢見頻度と Personality 機能との関連を検討したところ，Table 8, Table 9 のような結果を得た。

Table 8, Table 9 に見られるように，FH 群は T (思考；P<.05) が，FL 群は F (感

Table 8. 夢見頻度の高い群（FH群）と低い群（FL群）の MBTI の粗点の比較

（ ）内 SD

	FH群	FL群	t 検定
I（内向）	12.7 (5.3)	13.0 (5.4)	
E（外向）	5.9 (2.2)	6.0 (1.9)	
N（直観）	11.8 (3.5)	12.0 (4.3)	
S（感覚）	12.4 (5.6)	12.0 (4.8)	
F（感情）	11.0 (5.2)	12.9 (4.0)	†
T（思考）	12.1 (6.2)	8.8 (4.6)	*
P（知覚）	11.8 (5.2)	12.1 (5.2)	
J（判断）	14.0 (5.2)	12.9 (5.5)	

注 * P<.05 † P<.10

Table 9. 夢見頻度の高い群（FH群）と低い群（FL群）の MBTI の尺度得点の比較

（ ）内 SD

	FH群	FL群	t 検定
IE（内向—外向）	114 (13)	115 (13)	
NS（直観—感覚）	100 (17)	101 (17)	
FT（感情—思考）	99 (20)	109 (17)	*
PJ（知覚—判断）	99 (21)	98 (21)	

注 * P<.05

情；P<.10), FT（感情—思考；P<.05）が有意に高い得点を示した。この事から，夢を多く見る者は思考タイプであり，夢見頻度が依存する Personality 機能は，前述した元型夢の報告が依存する機能とは全く異なるものであることがわかる。又，夢見頻度と元型夢の報告率との関連を検討したところ，元型夢の報告率は FH 群は52%（33名中17名），FL 群は46%（41名中19名）で，両群間に有意差は認められなかった。以上の事から，夢見頻度と元型夢の報告の間には関連性がなく，互いに独立した問題であることが示された。

次に，夢興味と Personality 機能との関連を検討したところ，Table 10, Table 11 のような結果を得た。

Table 10, Table 11 に見られるように，全ての項目で有意差は認められず，夢興味と Personality 機能との間には関連性は見出せなかった。又，夢興味と元型夢の報告率との関連を検討したところ，元型夢の報告率は IH 群は 56%（86 名中 48名），IL 群は 63%（62 名中 39 名）で，両群間で有意差は認められなかった。以上の事から，夢興味と元型夢の報告の間には関連性がなく，互いに独立した問題であることが示された。

以上の事から，元型夢の報告は夢見頻度や夢興味とは独立した問題であり，夢の「深さ」の問題はそれ自身として１つの研究課題として考えうるであろうことが明らかとなった。

Table 10. 夢興味の高い群（IH 群）と低い群（IL 群）の MBTI の粗点の比較

（ ）内 SD

	IH 群	IL 群
I（内向）	12.9 (5.9)	12.5 (5.3)
E（外向）	5.7 (1.9)	6.2 (2.0)
N（直観）	12.5 (3.7)	11.6 (3.6)
S（感覚）	12.1 (4.4)	12.5 (5.1)
F（感情）	12.9 (4.1)	12.1 (4.1)
T（思考）	8.8 (5.2)	10.0 (5.0)
P（知覚）	11.4 (5.6)	11.1 (5.2)
J（判断）	13.9 (5.2)	14.1 (5.3)

Table 11. 夢興味の高い群（IH 群）と低い群（IL 群）の MBTI の粗点の比較

（ ）内 SD

	IH 群	IL 群
I E（内向—外向）	114 (13)	115 (14)
N S（直観—感覚）	99 (15)	102 (16)
F T（感情—思考）	105 (17)	109 (18)
P J（知覚—判断）	101 (22)	101 (21)

考　　察

本研究は，夢を「深さ」という新しい側面から数量的に検討することを試みたものである。本章では，これまでに明らかになったことをふまえながら，研究の問題点や今後の検討課題について考察を行なう。

まず，本研究から明らかとなったことは，〈夢の「深さ」の問題は「夢見頻度」や「夢に対する興味」とは全く別次元の問題と考えられる〉ということである。つまり，「夢をたくさん見る」とか「夢に関心をもっている」などということと，「深い夢を体験する」ということは全く関係がない，ということが示唆されているのである。又，本論文で紹介した Archetypal Dream Scale について言えば，夢の深さという質的側面を数量的に測定するという意味で実に興味深いものである，と考えることができる。しかし，この Scale は Jung. C. G. や Jung 派の分析家達が述べている元型の諸特徴を4つのカテゴリーに集約した，言わば理論的 Scale であるため，統計的な妥当性が十分に吟味されているとは言い難いという難点がある。さらに，本研究で，この Scale を用いて元型夢と評定された夢の中には，むしろ従来の研究で定型夢とされる夢に近いと思われるものも多く含まれていた。そして，臨床的に元型的な夢と感じられるものはそれほど多くはなかった。これらの点から，この Scale 自体をさらに，臨床的にも統計数理的にも，吟味・検討する必要が

あると感じられた。

次に，元型夢の報告と Personality との関連を検討するために，本研究では Jung. C. G. による Personality 論である向性及び心的機能を用いたのであるが，今後は Rorschach 等の投映法による自我機能や自我防衛機制の検討や，精神分裂性尺度，神経症性尺度との関連，又，ASC (Altered States of Conciousness；変性意識状態）やイメージの豊かさ等，多くの視点で検討を進めることが必要であろう。

最後に，研究の方法上の特徴がもたらすいくつかの問題について述べてみたい。本研究は調査という手法を用いたのであるが，その手法による問題として以上の事が考えられた。まず，本研究で我々が扱かった夢は，被験者によって「見られた夢」そのものではなく，言語によって「報告された」夢であるという点である。つまり，夢の報告は記憶や意識的無意識な選択等の過程を経た上で報告されたものである。それ故に，これはあくまでも「報告された夢」であって，報告するまでに致った被験者の種々の過程が反映されているのである。一方，心理療法や心理臨床の場などでの濃密な治療者—患者関係の中で報告される夢が，本研究で扱かった夢とはまた異なったものとなるであろうことは言うまでもない。このような夢報告にかかるであろうバイアスについて簡単にまとめたものが Fig. 1 である。

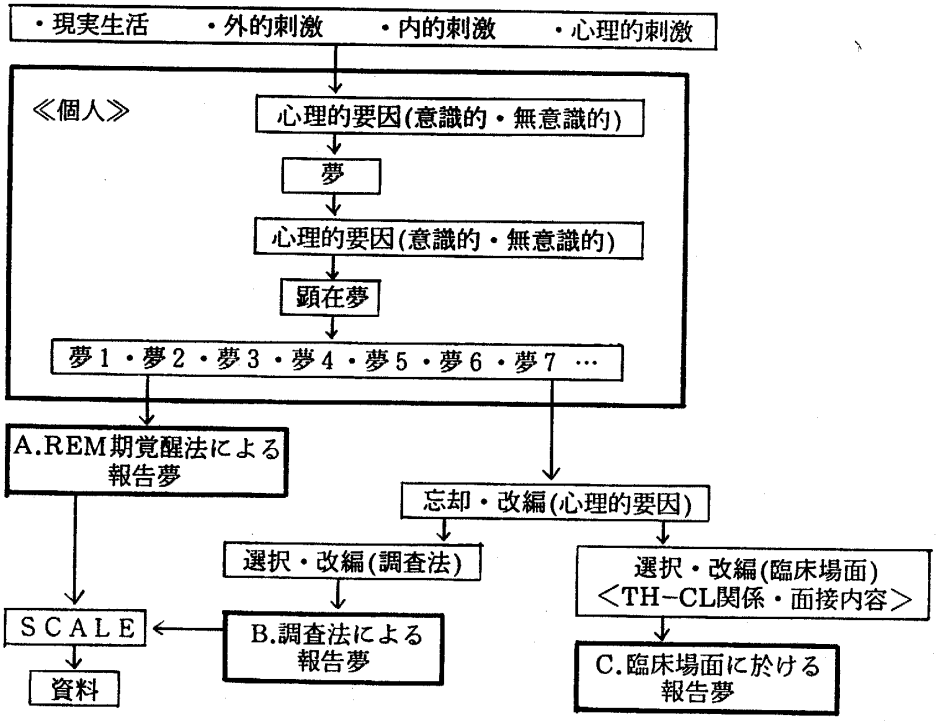

Fig. 1.　夢報告にかかるバイアス

次に，ただ1つの夢をとりあげ，元型的な夢を見る人，見ない人に分類するという方法・手順はやや乱暴にすぎるのではないかという懸念は否めない。この点は被験者の夢を時系列で把握し，それと継続的な性質である Personality とを比較する等の方法的吟味をする

必要がある。今後は以上の事をも十分に考慮した研究がなされねばならないと言える。

附記：本研究の遂行にあたって，早大版 MBTI（未発表）を御教示下さった東京歯科大学非常勤講師の宮脇龍介氏に感謝の意を表したい。

References

Jung. C.G.（高橋訳） 1970 「人間のタイプ」日本教文社
Kluger. H.Y. 1975 Archetypal Dream and "Everyday" Dream, Israel Annals of Psychiatry, 13, 6-47
Myer, I.B.（大沢他訳） 1982 「人間のタイプと適性」 日本リクルートセンター
新美良純・堀 忠雄 1979 「睡眠―その生理心理学―」 培風館
小川捷之編 1981 「臨床心理用語事典Ⅰ・Ⅱ」 至文堂
大熊輝雄 1977 「睡眠の臨床」 医学書院
P.A. Faver 他 1978 Meditation and Archetypal content of nocturnnal Dreams, J. of Analytical psychology, vol. 23, 1-22
P.A. Faver, G.S. Saayman 他 1983 Induced Waking Fantasy, J. of Analytical psychology, vol. 28
鑪幹八郎 1975 夢解釈の展望，精神分析研究 XX
東洋経済新報社 1976 SPSS 統計パッケージⅠ・Ⅱ
横地貴美子 1981 Myers-Briggs Type Indicator の基礎的研究，早稲田大学文学部卒業論文（未発表